

七、一味平等の徹底名字即仏と一切衆生を攝取

龍華像師の布教について

—南北朝動乱期に關聯して—

高 木

豊

鎌倉末期・南北朝時代にかけての日蓮宗教団史は当に日蓮宗の教団としての形成を物語るが、その典型的一例として、更に伸びゆく教線の前衛として京都に於ける日蓮宗教団の牙城を築いたものとして、この二の展望を担った像師の布教は、教団史研究上高く評價されなければならない。小稿は右の展望の下に像師の軌跡を辿らんと企図するものである。

ところで凡そ歴史学の対象たる歴史事象は、常に微視的、巨視的の二の方法論的視野の結節点として描き出されなければならない。故に他を闕ける一はその存在価値を極めて狭少なものたらざるを得ないことはいうまでもない。しかしこの様な危惧を抱き乍らも尙且小稿が像師の行蹟を巨視の見地より捉えんとしたのは、因より紙数の制限を感じたといえ、像師の歴史的背景があの半世紀に及んだ南北朝動乱期というすぐれて政治的社会的変革期であつたに外ならないからである。像師の布教は

八、広宣流布の信念に基く願業

これをその舞台とし、その変革期を前提として行われたのであり、人若しこの背景をネグレクトするならば、像師の完き歴史的画像を再現し能わないであらう。以下二三の問題を提出し、何よりも先づ自己の像師研究の覚悟としたいと思う。

像師の行蹟を見る時、直ちに問題となるのは、宗祖の王城弘通付托という伝説である。是の事は、現在では宗門の慣習的見地より略々妥当なものとして容認されているが、手続の上で問題がある。最近の御遺文研究の成果によつて（昭和定本日蓮聖人御遺文）宗祖に王城弘通の意図のあられたことは漸く明瞭となつた。そして從來の教団史研究の成果は（影山堯雄教授「日蓮宗教団略史」）像師の華々しい成功を告げるに吝かでないしかしといつて、この両者を直結したから宗祖と像師との間に付托の存在を肯定できるとはいひ得ない。この両者を架する史料の新しく提出されぬ限りはむしろ未解決の問題として残してをくのが妥当ではなからうか。

寧ろ注目さるべきは、像師と期を同じくした他門流の動向である。即ち中山門流・富士派等の史料はこの期に於ける先師達の京都に対する関心の並々でなかつたことを如実に示している六老僧を活動の要として形成された日蓮宗がその教団の形成と共に宗祖の残された王城弘通の遺図（それは特定の個人えでは

なくむしろ教団全体の課題としての)を実現せんとする動向が
教団史の主流として浮び上つてくるのが此の頃であつた。

日像之次ニハ二條西洞院北頼ニ青柳之ツジト申処ニ本門寺ト
テ天目門徒有之三番ニハ上行寺也開山日興聖人御弟子ニテ日
尊ト申也四番ニハ六條開山一眼兵部殿ト申人弘通シナビカジ
テ日靜聖人ヲ開東ヨリヨビノボセ申テ六條本國寺に被成申也
といわれる(與中山淨光院書)状態であつてみれば、像師の京
都進出とその成功は、むしろこの期の教団史の主流に達し最
も早く且つ堅固にその企図を実現したと云うべく、實に像師は
南北朝時代の教団史の典型的人間であつたのである。

京都に於ける像師の事蹟を見ていく時、二の峯に行当る。曰
く龍華の三圓三教と勅願寺繪旨の獲得である。

所謂龍華の三圓三教は次の三回である。

- 1、徳治3・5・20追却同3・5・23・赦免
- 2、延慶3・3・8追却同4・5・7・赦免
- 3、元亨2・10・25追却同2・11・8・赦免

これらの追却は子細に検討すれば、その理由が同一でなかつた
ことに気付く。即ち第一圓の理由は「号法花法門之宗誹謗諸經
其心更非止観明靜之行者佛法之魔障」とされたのに対して第二
圓のそれは、像師を核として結成された信者がすでに社会集團
として黙止できぬ存在に成長した爲であつた。前者が像師の主
張をその因としたとすれば後者はそれに吸収され結成された集

団がその縁となつてゐる。かく見れば、延慶三年という時点は
像師をとりまく日蓮宗教団の危機の歳であつたと断ぜざるを得
ないのである。然らばその危機を彼等は乗り切ることができた
であらうか。すでに第三圓を指摘できる事は、それを乗り切つ
たことを逆説的に示しているが、それにしても彼等の如何なる
性格がそれを可能にしたかは問われねばならない。

すでに東北大学の豊田武教授、同志社大学の林屋辰三郎教授
が指摘された如く、像師の社会的基盤が商工人であつたことは
事實である。しかしそれを商工人のみに期待するのはいさゝか
一面的考察の嫌がある。というのは、京都周辺に残した像師
の足跡の中に「一結講衆」の存在を見出し得るからである。(京
都史蹟勝地調査報告鶏冠井真經寺)即ち像師は農民を構成員
とする講を結成して自己の足場としていたのである。この事は
京都を追却された像師が何故山崎に居たかの問題に解決を與え
るものである。(輪師消息上聖部所收)即ち像師はそこに自己
の立場を見出し得たし更にその拡張を計つていたのであつた。
とにかく像師を支えた基盤が実はこの期に極めて顯著な成長を
示した商工人・農民であつたことは確かであり、社会的に上昇
線を描き得た彼等の史的位階と性格が先に指摘した教団の危機
を乗り切らしめたものであつた。

第三圓が月余を出でず許された後は漸く彈圧は影を潜める。
この事は必ずしも像師の主張が官憲に容れられたことを意味し

ない。むしろ政治情勢の変化の爲であつた。即ち打倒鎌倉幕府の空氣が顯著に濃厚となり、遂に正中の変・元弘の乱・建武中興という一連の倒幕運動が展開されるのであつて、彈圧が緩くなるのもそれに平行した。しかも單に消極的に彈圧がゆるめられるというわけではなく、遂に勅願寺繪旨を獲得し京都に於ける市民権を確保していったのである。しかし三度に亘つた彈圧を眺めて此に至ればその余りに唐突なるに驚かされる。何故に繪旨が與えられ何故にそれが「当宗の悦」として極言され、積極的にそれに答えていったのであろうか。

凡そこの時代に於ける人間や集團は夫々南北兩朝の何れかに去就したのであり、教団とてもその例外ではなく、自己のもつ兵力・経済力・祈禱力等を政治権力に提供したのであつた。しかしもとよりそれは一方的要請に対する答として提供されたのではなく提供の代償は当然求められたのであつたが、その代償の求め方に於いて新旧兩教の間には著しい断層があつた。この時代の社会

罪障消滅について

河村孝照

神と人との関係における宗教において、罪惡觀にその出発をおかぬものはない。キリスト教、回教然りである。然し、その滅罪にあたつて、それを主宰し得るものは、全智全能なる神のみのよ

史の大きな推移は地頭の莊園侵略・守護大名の成立であり、この動きは旧仏教を支えていた莊園を激しい動搖につき落した。旧仏教はその動搖を食い止め寺領の確保の爲に自己のもつ機能を政治権力に提供したのであつた。下降する自己をくいとめ得るブレッキが政治権力に外ならなかつた。かくして彼等と権力との結託は不可避である。この様な動きに対して、衰えたといへ尙強固な権力と權威を有していた旧仏教の勢力圏内に教団を形成しなければならなかつた新仏教は政治権力に自己の機能を提供することによつて彼等に対する防壁を獲得せんとした。それは、旧仏教の下降を食い止めるブレッキに對せば上昇への足掛りとも云うべきである。勅願寺繪旨が山門の訴に對する巨大な防壁となつたことはこの間の消息を物語るものである。もしも妙顯寺文書の中に凶徒退治の爲に經、經を誦誦したという史料を見出しても怪しむには足りない。何故なら、変革期に於ける人間の在り方はすぐれて政治的であるから。

く爲し得るわざごとである。何故なれば、神の意志、命令に背いた人間が罪人であれば、それを許すも、許さざるも、神の意志一つにあるからである。

仏教として罪に出發する。然し、その罪は、倫理的罪惡觀を超克した罪である。仏陀の教へは無常苦とともに始まるのであつて、この三界火宅の處に居して、「嗚呼、苦なり」と悶絶するところ